

おおむらの奥跡



天正遣欧少年使節顕彰之像

目 次

歴史のあらまし	1
古代の遺跡	3
寺院と神社	4
城跡と古戦場	8
文人・武人の史跡	15
キリシタン史跡	20
郷土芸能	26
大村寿しの由来	27
民話紹介	28
資料 大村家の系図	29
年 表	30
大村史跡等位置図	巻末

歴史のあらまし

大村の古代

市内の各所から、旧石器・縄文・弥生・古墳時代にわたる遺物が数多く出土しており、大昔から古代人たちが住んでいたことがうかがわれます。

最近（これまで）の調査で、黒丸遺跡では縄文時代晩期の日本で稲作が始まった頃の遺跡が、富の原遺跡では、弥生時代の環濠集落の跡が発見され注目を集めています。

花ひらく仏教文化

中世において、郡地区一帯（竹松、福重、松原）に郡七山十坊と呼ばれる寺院が建てられ、仏教文化の花が咲きました。又、大上戸川周辺にも多くの寺院が建てられ、活発に活動していました。

これらの寺院は、キリシタン時代に全て失われてしまいましたが、地名として残っているものもあります。

大村氏の入部、久原城時代

大村家史料では、正暦5年（994）、藤原直澄が、寺島に上陸して久原城に本拠をかまえ大村氏を名のり、以来14代500年近く久原城を居城とし、平時は乾馬場の大村館に居住したとされ、この間、京都大番役、鎌倉幕府の地頭をつとめ、文永の役、弘安の役の出征、南北朝時代は南朝のために働くなど、西国の武將として名をあげたと記してあります。

他の史料によると異説があり、大村氏の先祖は平姓で、はじめ肥前国藤津郡に本拠をおいたともいわれています。

戦乱の絵巻、好武、今富城時代

15代純治は、有馬勢の侵攻にそなえ福重に好武城を築きました。16代純伊は、若くして跡をつぎ、今富城や中岳、鳥甲などにも砦を築いて守りを固めましたが、文明6年（1474）（永正4年（1507）の説あり）の中岳合戦に敗れ玄海の孤島加々良島に落ちのびました。そして6年後、苦勞のすえ旧領を奪還しました。この時、大村寿しが起り、これを祝って黒丸踊・寿古踊・沖田踊が始まったといわれます。

キリシタン全盛の三城城時代

純忠は有馬家から養子に迎えられ、18代領主となり、三城城を築きました。永禄5年(1562年)横瀬浦を開港して南蛮貿易を始め、その後、福田、つづいて長崎を開港し、今日の長崎市発展の端緒をつくりました。

永禄6年(1563)には、洗礼を受けて日本初のキリシタン大名となり、領内の改宗を推し進め、領民全てがキリシタンとなる全国的にも稀な地域となりました。また、天正10年(1582)には、九州のキリシタン大名大友宗麟、有馬晴信と共に天正遣欧少年使節団をローマに派遣したことは、世界的に有名です。

生涯を通じて近隣諸豪の侵攻が相つぐなど戦乱の絶え間がなく、三城七騎ごもりや昔無田合戦などの史話が残っています。

藩政の確立期、玖島城時代

大村氏19代(初代藩主)大村喜前は、朝鮮の役から帰り、慶長4年(1599年)玖島城を築いて移りました。以来12代藩主純熙(幕末)に至るまでの270余年間ここが二万七千石大村氏の居城となりました。長崎が没収され、幕府のキリスト教禁教政策のもと、キリシタンが盛んであった大村藩では特に厳しい禁教策が求められ、藩政の大きな課題となりました。この間、近世大名としての基盤を築く過程において、ご一門払い、3代藩主純信の跡目相続、“郡崩れ”といわれる潜伏キリシタン発覚事件などがありました。江戸中期以来は、産業の開発、学問の振興などに尽して藩政の充実につとめました。幕末には勤皇思想がぼつ興し、三十七士を中心に藩論を統一して維新達成に大きな貢献を果たしました。

明治以降の大村

中央では、政界、財界、学界にわたり、大村出身者は大いに活躍し、また大村は東彼杵郡の経済の中心地でした。明治30年(1897)陸軍歩兵連隊の駐とんを契機とし、大正12年(1923)には海軍航空隊が設けられ、つづいて昭和16年には東洋一といわれた第21海軍航空廠が設置され軍都として栄えました。昭和17年に1町5村が合併し、全国188番目の市制を施行しました。

古代の遺跡

こがね
黄金山古墳 バス今富下車7分 今富町

今富町の小高い丘の上であり、終戦直前、海軍が砲台を建設した際に発見されたもので石棺系横口式石室の上に封土した円墳とみられ、石室部はほとんどこわされています。石郭内部には赤色の酸化鉄（ベンガラ）が塗布され、発掘当時土師式土器（壺、高杯）鉄剣、人骨などの出土品がありました。

小路口鬼の穴古墳 市指定史跡 バス竹松駅下車5分 小路口本町

この古墳は、古代この一帯に勢力のあった豪族のものと考えられますが、横穴式石室を持つ古墳で、6世紀頃のものとして推定されています。江戸時代にはすでに石室が開口しており、その頃から、俗に「鬼の穴」と呼ばれてきました。この地域には、他にも幾つかの古墳が散在していましたが、現存しているのはごくわずかです。

玖島崎古墳 市指定史跡 バス公園前下車15分 玖島1丁目

この古墳は、横口式小形石室古墳と呼ばれ、6～7世紀にかけてつくられました。羨門には2本の石柱がたてられた天井石のないこの様式の古墳は、北九州の海岸に多くみられるもので、この一帯に群をなして設けられていました。当時、海を通じて文化の交流のあったことを物語っているのかもしれませんが。



条里遺構 バス郡橋下車5分

沖田町から黒丸町にわたる水田地帯は、道路や畦が碁盤の目のように整然していますが、これは最近区画整理されたものではなく、古代の条里制の名残であり、このような遺構は三城小学校の北方にも若干みられます。

一区切を1町（今の1町2反）とし、長地型（60間×6間）で、男1人に2反、女には男の3分の2の田地を与えられたもので、今も「九の坪」などの地名が残っています。

寺院と神社

ぼうのいわ 坊 岩

郡岳の西中腹にそびえ立つ岩を坊岩といいます。今から1200余年の昔、和銅年間、高僧行基が全国を巡歴した時、大村に来て波間から飛んだ怪光を追って郡岳中腹に至り、釈迦・阿弥陀・観音の三尊を発見し、これを祭って太郎山大権現と称したと伝えられています。

そのため坊岩と呼ばれるようになりましたが、のち、御堂は多良岳に移され、キリシタンに焼かれたあと池田山に再興されました。

延命寺跡 バス東光寺下車5分 松原 丁目

奈良時代、行基によって開かれたと伝えられます。紫雲山延命寺天平20年(748)の銘ある標石が、現在史料館に保管されています。郡一帯には、延命寺を中心に郡七山十坊がつくられ、仏教文化の花が咲きました。天正2年(1574)キリシタンによって焼き払われたあと、天保4年(1647)十二社権現が建てられました。

長久寺跡 バス乾馬場下車10分 乾馬場町

太良山大権現の里坊で、富松山千手院長久寺という真言宗の寺があり、16代領主大村純伊の三男、阿音法印が居住していましたが、天正2年(1574)キリシタンによって焼き払われました。元和9年(1623)3代藩主によって再興されました。現在、その跡に天満宮の社殿とその傍に太良山法主の阿音法印および長久寺開山快翁法印の墓碑があります。

多羅山宝円寺跡 バス鳥居前下車15分 池田2丁目

古くから、大村家の宗廟とされていた太良山大権現の再興を企て、万治3年(1660)4代藩主大村純長は、城の鬼門にあたる池田の山に大村家鎮護の多羅山大権現と、その神宮寺の宝円寺と祈願所として建立しました。以来、真言宗の領内本山として栄えましたが、明治になって壇家がなかったため廢寺となりました。

白水寺跡 バス福重下車 10分 皆同町

禅宗の寺で、郡七山の一つでした。境内には、第17代領主大村純前すみあき（天文20年 = 1551年没）の墓所がありました。天正2年（1574）キリシタンによって寺とともに取りこわされました。その跡に、正保4年（1647）家老大村彦右衛門によって観音堂が建立されましたが、大風で倒かいしたので、文政12年（1829）石祠が再建されました。

深重山妙宣寺 バス福重下車 20分 福重町

慶長7年（1602）大村喜前よしあきにより創建されました。領内で日蓮宗の布教につとめた仙乘院日順上人を開山とします。

奈良時代に、郡七山十坊こおりとあって仏教文化の花を咲かせた郡の中心穀倉地帯を眼下に見下し、大村の北の砦、法城の感がありました。境内には樹齢数百年の大蘇鉄、切支丹残徒が投げた丹投石、四面菩薩・六地藏ほさつがあり、寺宝として喜前よしあきの書翰や延命寺縁起が残っています。寺史秘めし丹投石や蟬時雨 梨村

万歳山本経寺／大村藩主大村家墓所 国指定史跡

バス上杭出津下車 3分

本経寺は慶長10年（1605）に初代藩主大村喜前よしあきによって創建された大村家の菩提寺で、日蓮宗の寺院です。キリシタン時代に失われていた寺院の復興第一号として建立され、大村藩の禁教と仏教復興の重要な施設でした。現在でも本堂をはじめ江戸後期の建物が多く残ります。

大村家墓所には、初代藩主喜前よしあきから11代藩主純顕すみあきまで歴代藩主とその一族の墓があります。6mを越す巨大な墓が建ち並び、様々な様式の墓は見事な石造美術品です。キリシタン大名であった大村家が、禁教下で、キリスト教を棄てて仏教信仰を幕府や領民に証明するために巨大な墓を建てたと考えられます。

キリスト教から仏教へと宗教政策を示す文化財として、国の指定を受けています。



白竜山長安寺

JR 大村駅より徒歩5分 武部町

慶長14年（1609）19代（初代藩主）大村喜前よしあきにより創建され、九誉上人を開山とします。喜前よしあきの姉於福の方にゆかりが深く、寄進された「白竜の手水鉢」は寺宝として現存し、市文化財に指定されています。また本尊阿弥陀如来立像は、浄土宗総本山京都の知恩院から寛政8年（1796）寄進されたもので、平安時代後期の作といわれ、市文化財に指定されています。なおこの寺には、將軍家の位牌、於福の方の墓、捕鯨で有名な深澤儀太夫さだゆづの墓、千日念仏回向塔えこう、中国式の石門、土塀、マリア観音などがあります。



専念山正法寺

バス新城入口下車7分 杭出津

大村喜前よしあきは慶長7年（1602）より肥後の浪人林小七右衛門に草庵を結ばせ、真宗を布教させましたが、2代藩主純頼すみよりの代になって、元和2年（1616）京都東本願寺の末寺として創立しました。開祖の道閑どうかんこと林小七右衛門は、はじめ肥後国主加藤清正に仕えましたが、故あって浪人となりました。大村を訪ねた時、漁夫と争い殺傷事件を起こしましたが、相手がキリシタンであったため許され、その後悔い改め宗門に帰依しました。境内には、大村氏16代純伊すみこれの墓や六地藏があり、寺宝として加藤清正や宮本武蔵の書と伝えられるものがあります。

東光寺遺跡 市指定史跡

バス東光寺下車3分 松原1丁目

松尾山東光寺という禅宗の寺で、郡七山のひとつとされていましたが、天正2年（1574）、キリシタンにより焼き払われました。正保4年（1647）その跡に薬師堂が建立され、さらに寛政8年（1796）再建されました。

一説には、天平14年（742）行基によって、十二坊のひとつとして創建されたとの伝えもあります。遺跡には、正和5年（1316）の銘がある東光院阿闍梨性元の墓、三伯しやうわとしるした大石（馬の神）などがあります。



円融寺庭園 国指定名勝 (昭和 51 年 12 月 27 日指定)

バス裁判所前下車 5 分 玖島 2 丁目

円融寺は承応元年(1652) 4代藩主純長により創建されました。純長は幕府勘定奉行伊丹播磨守勝長の四男でしたが、大村家養子となりました。徳川家光の裁可により跡目相続が許された恩義に報ゆるため、徳川家の位牌を



祭ることを願ひ出て、特別に許可を得たゆかりの寺です。建立にあたっては、捕鯨業で有名な豪商深澤儀太夫の寄進によるものと伝えられています。明治になって、せい忠蛸そして今は護国神社といい、戊辰の役戦死者の墓、三十七士の碑、明治以降戦没者の忠魂碑などがあります。また、境内には、斜面を利用した枯山水の石庭が残り、江戸初期の様式を伝える名園といわれています。この庭の最大の特徴は規模の雄大さと傑出した三尊方式石組にあります。東西 50m に及ぶ山畔^{さんぱん}を利用し、400 個以上の石を組み合わせる構成は見事なもので、江戸初期様式の石組庭園としては全国にも数少ないものといわれています。

昊天宮^{こうてんぐう}

バス宮小路下車 1 分 宮小路 2 丁目

古くから彼杵郡の総鎮守でしたが、創立は明らかではありません。大村氏入部後は、初代直澄^{なおすみ}を副祭し、のち、大村家代々の守護神となりました。天正 2 年(1574) キリシタンによって焼かれましたが、慶長 7 年 (1602) 19 代喜前によって再建されました。

山田権現跡^{さんげん}

(山田の滝) バス中諏訪下車 40 分

大村氏 16 代純伊^{すみこれ}は、中岳合戦に敗れ、6 年の流浪の末、旧領を奪回することができました。その大願成就に因み、山田権現を創建しました。天正 2 年 (1574)、キリシタンによって焼き払われましたが、寛永 14 年 (1637) 再興されました。山田の滝^{はつかけ}一帯は法華行者の霊場でありました。なお明治維新の三十七士が密かに同盟を交わした場所でもあります。

城跡と古戦場ほか

寺 島 (藩祖先上陸の地) 市指定史跡

バス公園前下車 15分 久原1丁目

大村家史料によると、
正暦5年(994)、従5位
下遠江権守とおとみごんのかみに任ぜられた
藤原直澄なおよすみは、肥前のうち
藤津・彼杵・高来の3郡
の領主として、伊予大洲
から海路を伝って下向し
ました。従者には、朝長、
富永、久門、河野、掘池



らを従え、付近の乙名たちに迎えられて、大村における第一歩を印たところが寺島であると伝えられています。この島には、船のとも綱を結んだという石めおと(夫婦石)が残っています。また元禄の頃、寺島山吉祥院という寺がありましたが、今は、市杵島神社が祭られています。

大村館跡 バス本堂川橋下車北側 乾馬場町

大上戸川沿いにあり、永禄7年(1564)大村氏18代純忠が三城を築いて移るまで、歴代領主が居住した館の跡です。

この館は平常時の住いで、非常の時は久原城に、のち、好武よしたけや今富の城に立てこもったわけです。館の北角には、宮原氏の屋敷跡があり純忠の重臣宮原加賀の墓碑がありました。

久原城跡 バス本小路下車3分 玖島1丁目

大村家史料によると藩祖直澄なおよすみ以来、15代純治すみはるが好武よしたけ城を築いて移るまで、大村氏の居城でした。その間約500年、大村氏は京都大番役、鎌倉幕府の地頭をつとめ、弘安の役にも出征し、南北朝時代は南朝のため働くなど、西国武将として名を挙げ、平時は本堂川添いの大村館に居住したとなっています。

城跡は約5,000m²、大手は北西からめに、搦手が南東に面していました。

大村家家紋の由来

これについて次のように伝えられています。

鎌倉時代のはじめ、大村家7代忠澄は、兄の有馬経澄つねずみ（庶子のため分家）と共に京都大番役として御所の守護に当たっていました。たまたま京都のまちに大火があり、御所も危うく成りましたが、警固の者たちの働きによって、



やっと類焼を免れることが出来ました。この時の兄弟の働きは抜群だったため、天皇は、両人を側近く召され、輪切りにした木瓜もっこを与え、その功を賞讃されました。両人は直垂ひたれの袖で拝受しましたが、瓜面の跡が鮮やかに残り、何時までも消えませんでした。それ以来、大村家の紋は五ツ木瓜を用いることになったといわれています。

好武城跡

バス福重下車6分 寿古町

戦国時代、大村氏15代大村純治すみはるは相次ぐ有馬勢侵攻にそなえ、久原城だけで敵を防ぐのは困難と判断し、福重に要害の地を選び好武城を築きました。南のほうに郡川があり、西北は深田で守備堅固の城でした。

今富城跡

バス福重下車5分 皆同町

文明年間（1469～1486）大村氏16代純伊すみこれは、父純治すみはるの死後その跡目を継ぎましたが、有馬勢の攻勢がますます激化するので、さらに備えを固くするため、父が福重に築いた好武城よしたけのすぐ近くで現在の市福重出張所の裏山一体に今富城を築いてここに移りました。

この城も郡川を前にし、後ろは深田に囲まれた要害の地でした。しかし、激しさを増した有馬勢の侵攻に抗しきれず、文明6年（1474）16代純伊すみこれは中岳の合戦に敗北し、以後6年間、有馬氏の領有となりました。以後、折尾瀬（佐世保市内）、佐々かから（北松浦郡内）加々良島（佐賀県内）へと逃れましたが、6年後旧領地を取り返すことができました。

日本初のキリシタン大名として有名な18代大村純忠が、永禄7年(1564)に完成させました。子の喜前が玖島城へ移る慶長4年(1599)まで、大村氏の居城でした。多良山系から延びる尾根の先端を利用したこの城は、石垣がなく、堀や土塁で守られた中世の特徴を持っています。

元亀3年(1572)には、武雄の後藤氏、諫早の西郷氏、平戸の松浦氏の軍勢に急襲包囲されましたが、わずかな手勢でこれを防ぎ、勝利をおさめたという「三城七騎籠り」が起きました。現在、主郭(本丸)跡には、長崎県忠霊塔があります。主郭東側の曲輪では発掘調査が行われ、大規模な堀、土塁や建造物跡が見つかり、当時の生活用品や鉄砲の弾が出土しました。

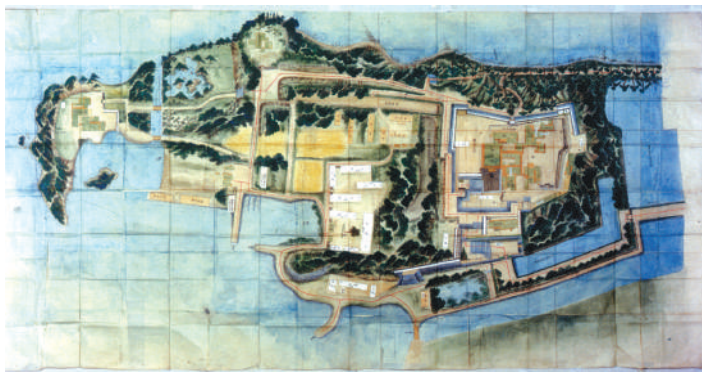
慶長4年(1599)、初代藩主大村喜前が築城してから12代藩主純熙の代(幕末)まで、270余年間大村氏の居城でした。喜前は、秀吉の死後、天下の乱れを恐れて防備を固くするため、朝鮮の役での教訓を生かし、三方を海に囲まれた要害の地玖島を選んで本城を築き、三城城よりここに移りました。

慶長19年(1614)大改修を行い、最初北側にあった大手を、現在のように、南側に移しました。この大改修の設計を、築城の名人加藤清正に指導を仰いだと伝えられています。本丸には天守閣はなく、平屋の館がありました。城の石垣は、当時のまま良く残っており、特に南堀に面した石垣の美しい勾配は壮観です。

海に囲まれた玖島城には、御船蔵、新蔵波止、船役所跡など海運に関する施設が多く残っており、海城の特徴を見ることが出来ます。また、遠浅のため敵の兵が上陸できない上、城近くの遠浅の海の中には捨堀を設けるなどしていましたので、一見平凡そうに見えても難攻不落の名城でした。

明治17年(1884)、本丸跡に歴代の藩主を祭る大村神社が建てられ、現在では桜・つつじ・花しょうぶが咲き競う大村公園として広く市民や観光客にも親しまれています。





大手入口門跡 現在の公園入口一の鳥居の地点にありました。

ふたえ
二重馬場 大手門入口より大手口に通じる2本の道路をいい、慶長19年（1614）に造られました。人道と馬・荷車の道に分けられたものです。

大手門跡 現在の大村公園四の鳥居の地点で、延宝5年（1677）に門櫓が造られ、嚴重な門扉で入口を開閉していました。

本丸跡 本丸は東半分が藩主居住地、西半分がまつりどころ政所でした。3527坪余の内、建物敷地が648坪、本丸の周囲は、延250間、高さ5尺8寸の塀で囲まれ、矢狭間121個、鉄砲狭間123個、石火矢狭間6門が設けてありました。

いたじきやくら
板敷櫓台跡 大村公園の南側にあり櫓を復元しています。石垣は扇勾配の美しい曲線を描き、玖島城で一番美しい所です。

からめて
搦手門跡 本丸の北側にあり、築城当時の大手門です。

武家屋敷通り

大手門入口から岩船に入る橋の左手少し先までの本小路一帯が藩重臣たちの屋敷跡で、このほか上小路、外浦小路、小姓小路、草場小路、岩船、日向平、上久原、下久原が武家屋敷通りでした。今も上小路、小姓小路などでその面影が残っています。

五小路武家屋敷通り

バス大村市役所前よりすぐ

大村市玖島1丁目 2丁目 片町 久原1丁目

玖島城下の武家屋敷街は5つの通りを中心としており、総称して五小路と呼ばれていました。玖島城築城後から通りが形成され、重臣などの住まいとなっていました。以下に五小路を紹介します。

本小路 ほんこうじ 大手門に通じ、武家屋敷街の本になる通りであったため、本小路と名付けられました。藩校や会所など藩の施設が多くありました。

上小路 うわこうじ 元は、地名から尾ノ上小路と呼ばれましたが、後に省略して上小路と呼ばれるようになりました。家老屋敷跡など石垣が良く残る通りです。



小姓小路 こしょうこうじ 当初、殿様の側仕えをした小姓が住んだことから小姓小路と呼ばれました。石垣が最も良く残っている通りです。



草場小路 地名をとって、草場小路と名付けられました。五色堀や旧円融寺庭園が残る通りです。



外浦小路 ほかうらこうじ 最初、外浦衆が住んだことから外浦小路と呼ばれました後には家老などが多く住まいましたが、現在は通りそのものが無くなっています。

長崎街道

江戸時代、長崎から小倉を結んだのが長崎街道です。鎖国の中、幕府唯一の対外貿易港であった長崎から様々な品物や情報がこの街道を通り全国へと伝わっていきました。街道は、大村市内を南北に通り、通り沿いに様々な文化財が残っています。また、市内には大村宿と松原宿の2つの宿場跡があり、宿場の歴史を活かした町おこしが行われています。諫早領との境の鈴田峠は、当時の景観が良く残っていると、文化庁により歴史の道百選に選ばれています。

大村宿 大村駅より徒歩5分 本町

大村宿は、現在の中央商店街本町アーケード沿いにありました。本陣や脇本陣、高札場などがあり、本陣には、捕鯨で有名な深澤家の屋敷が使われました。

松原宿 松原駅より徒歩5分 松原本町

大村宿から北に約10kmにある宿場でした。本陣などはなく、茶屋があり、大村宿と彼岸宿の間の休憩をとる宿場でした。八幡神社や旧松屋旅館などがあり、当時の景観を良く残している地区です。

鈴田峠 バス二本松より徒歩30分 中里町

大村領と諫早領との境の峠で、当時の景観が良く残っている箇所として、文化庁歴史の道百選に選ばれています。駕籠立場跡や藩境石などを見ることができま

大村藩お船蔵跡 県指定史跡 バス公園前下車10分 玖島1丁目

この船蔵は、元禄年間に大村藩4代藩主大村純長の代に、玖島城に付属する船蔵として構築されたもので、藩主専用船など藩の船を格納していました。3本の船渠を成す石垣がよく残っており、柱穴が残っていることから、当時は、屋根があったと思われます。



大村藩の領地は、大村湾を取り囲む形をしており、海上交通は特に重要視されていました。この船蔵は、そのような海と密接な関わりがあった大村藩や玖島城の性格を示す重要な遺構です。

本陣跡 バス西本町下車1分

本陣とは江戸時代に各宿駅にあった最高級の旅館で、大名、公卿、幕府の役人などが宿泊しました。ほかに脇本陣があり、2人の大名が同駅に休泊する場合、格式上位の大名が本陣に、他の大名が脇本陣に泊まるならわしでした。

大村では4代藩主純長時代、捕鯨で有名な深澤儀太夫の邸宅が代々本陣に当てられました。今の本町の浜屋付近で間口45間余、奥行36間余、棟数12もあったといわれます。なお脇本陣は、今の本町の明治生命付近で間口25間余、奥行28間、棟数7の構えであったと伝えられています。

大村藩砲学所跡 バス公園前下車10分

慶応元年(1865)藩内の砲術三家(千葉流、^{おきの}萩野流、測山流)の私塾を廃し、前舟津に砲学所を開きました。ここでは鉄砲、大砲の砲術をはじめ、火薬、鉄砲鍛冶のことも学ばせました。背後の高台には鉄砲射撃の実技場である的場があり、今も南側に射撃の防壁となったとみられる高い石垣の一部が残っています。この砲学所は明治4年(1871)に廃止されました。

中岳古戦場の跡 市指定史跡 バス横畑下車すぐ 中岳町

文明6年(1474)、島原の領主有馬肥前守貴純^{たかすみ}は2000余の大軍を率い、諫早、本野を経て大村に来襲しました。大村氏16代純伊軍^{すみこれ}は700の手兵で防戦しました。

はじめ、有馬勢は大村方を小勢と見て強引に戦いをいどみましたが、先陣の長岡、庄の勢が奮戦して敵を追い返すこと4度、さしもの敵も攻めあぐんでいました。その時第3陣の鈴田道意が、突如敵方に寝返ったため形勢は逆転し、大村方の将兵の多くは壮烈な戦死をとげ



ました。純伊^{すみこれ}は危うく難をのがれ、郡岳から松原、折尾瀬、佐々を経て玄海の孤島加々良島へと落ちのび、6年後の文明12年(1480)旧領奪回を果たしたのですが、田原の中に残る長岡越前、庄左近太夫一族の墓が、今なお戦国の昔をしのばせます。

菅無田古戦場の跡 市指定史跡 バス宮代下車10分 宮代町

天正5年(1557)、竜造寺隆信は、有馬氏の本拠島原攻略を進めるかたわら、有馬方についていた大村氏を制圧し、同時に外国貿易港長崎^{だんじょう}を得ようと、8000人の大軍を率いて萱瀬^{うねめ}に来襲しました。大村勢は、萱瀬の郷士峰弾正、峰采女を大将に300人が菅無田砦に籠って防戦しましたが、2日間にわたる激戦でことごとく戦死をとげました。しかし竜造寺方も700余人もの損害をうけたため翌朝引き上げようとしたが、朝追岳^{あし}の本陣を大村純忠に不意打ちされ、さらに大きな損害をうけて逃げました。

今はみかん園として開墾されていますが、その一角に峰弾正、采女などの墓があります。また麓には、その時戦死した乙女たちの墓もあり、百姓までともに奮戦した当時の模様がしのばれます。

文人・武人の史跡

大村彦右衛門の墓 市指定史跡 バス公園前下車 15分 久原1丁目

大村彦右衛門純勝は、大村純忠、^{よしあき}喜前、純頼、純信に使用した大村家の重臣で、家老として、御一門払いやキリシタン禁制など、江戸時代初めの大村藩の難題解決に尽力しました。中でも特に2代純頼公が急死し、大村藩はお取りつぶしの危機になったとき、幕府に掛け合い、大村家の存続を認めさせた活躍は有名です。墓は久原1丁目にあり、巨大な墓石を見ることができます。また、幼君の身代わりとなって無くなった娘の墓や身代わり観音もあります。



^{ごこうかん}五教館御成門 県指定史跡 バス公園前下車 3分 玖島1丁目

大村藩の藩校として、203年間にわたり藩内子弟の育成が行われました。ことに、維新前後には多くの有為な人材を出して有名になりました。藩校は最初集義館と呼び、寛文10年(1670)城内桜田に建てられましたが、のち静寿園、さらに五教館と称して改築され、天保2年(1831)本小路に移されました。



五教館とは、君臣義あり、父子親あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信ありの五倫の道を教える学校という意味です。幕末には士だけでなく百姓、町人にも聴講を許したことは、当時としては画期的なことでした。また、校内には、治振軒と呼ぶ武芸所を置き、文武両道錬成につとめましたので、幾多の有名人が輩出しました。現在大村小学校に残る黒門は、御成門と呼ばれ藩主の出入りに使用したものです。

^{ほくちん}千葉ト枕の墓 市指定史跡 バス桜馬場下車 3分 桜馬場1丁目

飯笹平六左衛門^{たねしげ}胤重はト枕と号し、代々砲術家として大村藩に仕え、大砲や軍鐘の鑄造に当たっていましたが、時の4代藩主純長より放虎原の開拓を命ぜられ、寛文4年(1664年)以来、160余町歩の田畑を開拓しました。この一帯の道路には、松や桜の並木を植えましたので、並松、桜馬場の地名となりました。また、萱瀬村の黒木には杉苗7万本を、竹松、西大村附近には数万本の榎と、紙の原料となる楮を植えるなど、産業の振興に大きな貢献がありました。

野岳湖と深澤儀太夫 バス野岳湖終点下車 東野岳町

深澤儀太夫は、九州捕鯨の草分けといわれ捕鯨で財を築きましたが、これを藩財政や社会事業に献金し、寺院の建立などをおこないました。とくに領内の各地に溜池を築造し、かんがいの便をはかりましたが、その代表的なものが野岳湖です。

野岳湖は、当時の金で4200両の巨費を投じ、寛文元年（1661）から1年7ヶ月の歳月をかけて完成した周囲4キロの湖で、



いまなお周辺水田をうるおしています。現在野岳湖周辺は、多良岳県立公園野岳湖公園として県内外の多くの人々に親しまれています。深澤儀太夫勝清の墓は長安寺にあり、市文化財に指定されています。

川原^{ゆうゆう}悠々句碑／川原悠々の墓 市指定史跡

「常ならば 言い消す程よ 初霞」とする悠々の句碑は現在片町の八坂神社の境内に建てられています。また、大村公園中の島にも句碑が建てられています。

悠々は安永5年（1776）千綿に生まれました。享和元年（1801）江戸にのぼりましたが、生来病弱のため官職を辞し、郷里に帰り俳諧の道を志しました。天保4年（1833）再び江戸にのぼり、俳人の蒼蚪、梅室らと交わり、芭蕉の流れを学び、有名な「萩苞集」を著わしました。後年、草場の池の坊に「三時庵」を結び、句作に専念しましたが、安政4年（1857）後木場の自宅にて82才で亡くなりました。墓は須田の木町吹上墓地の一番上手にあり市指定文化財となっています。

斎藤道場跡 バス市役所前下車 5分 片町

幕末、江戸の三大剣客の一人斎藤弥九郎の三男歆之助は、鬼歆という仇名があるほど稽古が激しく、得意の突きは天下無類といわれました。

安政元年（1854）12代藩主純熙に招請されて剣術師範となり、片町に新道場「微神堂」を建て神道無念流をひろめ、大村藩の武名を天下に高めました。斎藤歆之助の碑は玖島城大手門に入ってすぐ右手にあります。

旧楠本正隆屋敷（旧楠本家住宅） 県指定有形文化財

バス裁判所前下車 10分 玖島2丁目

楠本正隆は、天保9年（1838）岩船に生まれ、幕末の倒幕運動にも加わり、三十七士の一人として活躍しました。

明治元年5月、長崎府判事となり、新政府の要職にある井上聞太などと親交を深めました。明治3年に上京し、5

年には外務大丞となり、ついで、新潟県令（知事）に任命され、様々な難題の解決に取り組み、名県令とうたわれました。

明治10年には東京府知事、12年元老院議員、22年東京市議会議長、23年衆議院議員、26年衆議院議長などを歴任し、29年男爵に除せられ、代議士を辞任し、35年に65歳で亡くなりました。

この屋敷は、明治3年に正隆によって建てられたもので、大村に残る貴重な武家屋敷遺構として公開されています。

開館時間は9：00～17：00 月曜休館 入館料 大人100円 小中学生50円



古田山^{ほつそう}疱瘡所跡 市指定史跡

バス大多武公民館前下車 10分 東大村2丁目

文政年間、日本各地に^{ほつそう}疱瘡（今の天然痘）が流行し、大村でもその対策に悩まされていました。藩医長与俊達は天保元年（1830）痘家となり、この古田山にあった患者の融離収容所に研究所を併設して、疱瘡の根絶に苦心しました。

俊達が、当時画期的な^{しゅとつ}種痘法といわれた人痘腕種法や、日本最初といわれる牛痘接種に成功したのはこの古田山でした。

長与俊達の墓 市指定史跡

バス裁判所前下車 15分 玖島3丁目

俊達は藩主の侍医俊民の二男として、寛政2年（1790）に生まれました。長崎で洋医学を修め種痘法を研究し、藩命で種痘家となり、古田山に疱瘡所を開き、当時大流行の天然痘に対処しました。種痘についてはとくに研究を重ね、鼻種法を腕種法に改めて安全性を高めました。嘉永2年（1849）遂に日本で最初といわれる牛痘に成功することができました。

長与専齋の旧宅 市指定史跡 バス国立病院前下車2分 久原2丁目

初代衛生局長として近代医学制度の基礎を築き、「衛生」の用語をつくったことで有名な長与専齋の旧宅です。

天保初年、祖父俊達によって建てられ、「きうきせい宣雨宣晴亭」と呼ばれました。専齋は幼少の頃この家で育ちました。当時は片町の海岸にありましたが、昭和33年現在の国立長崎医療センター内に建物の一部を移築され、現在は専齋の雅号をとって「しょうこうかん松香館」と呼ばれています。



松林飯山の墓 市指定史跡 バス須田ノ木下車5分 素田ノ木町

飯山は天保10年(1839年)筑前国早良郡(現福岡市早良区)に生まれ、9才の時、母の郷里大村に移り住みました。幼時から神童と呼ばれ、五教館を経て江戸の昌平校に学びました。8年後大村に帰り五教館の学頭、教授となり、藩内子弟の教育に情熱をそそいで、勤皇思想を鼓吹しました。渡辺清、昇らと三十七士の血盟を交わり、そんのうじょうい尊王攘夷運動に参加し、思想的中心人物として活躍しましたが、維新を目前にして慶応3年、(1867)29才で凶刃に倒れました。

のち従四位を贈られ、吉田松陰とともに靖国神社に祭られました。この墓は、飯山の遺徳を慕う門弟らが建立したものです。

浜田謹吾少年の墓 バス国立病院入口下車10分 久原1丁目

戊辰戦争で奥羽追討の北伐軍に大村藩により出征した326名のなかに、15才の少年鼓手ほしん浜田謹吾がいました。明治元年(1868)9月14・15日、大村藩軍は暴風雨の中をかりわの刈和野(秋田県)で大いに奮戦し、かくのたて角館へ転進して大功をたてました。

しかし、謹吾少年は15日の刈和野の戦いで戦死しました。その血染の衣の襟には母が出征の際、わが子を励ますために書きしるした歌が縫いつけてありました。「二葉より手くれ水くれ待つ花は君がためにそ咲けよこのとき」

これをみた現地の人々は大いに感激し厚く葬りました。こうした縁で現在、秋田県仙北市角館町と姉妹都市となりました。少年の墓は、久原1丁目の浜田家の墓地にあります。大村護国神社境内にも祭られています。

長岡半太郎屋敷跡 市指定史跡

バス国立病院前下車5分 久原2丁目

長岡半太郎は、磁気学、地球物理学、原子構造論等の世界的物理学者として功績を挙げ、わが国最初の文化勲章をうけました。大阪帝国大学総長、日本学術振興会会長を歴任しましたが、ノーベル賞を受賞した湯川、朝長両博士も半太郎の学術上の流れをくむ人です。久原2丁目にある屋敷跡は、半太郎が少年時代育ったところですが、父長岡治三郎が三十七士として、松林飯山、渡辺清・昇らと盟盟を交わした所でもあります。

荒木^{じっぼ}十畝の生家跡 バス国立病院入口下車5分 久原2丁目

十畝は、明治5年(1872)久原2丁目の朝長家に生れ本名を悌二郎といました。中学時代から絵を志ざし、上京して荒木寛畝^{かんぼ}に師事し、天分が認められ養子となり十畝^{じっぼ}と号しました。日本画壇の重鎮として、数多くの力作を残しました。芸術院会員、日本画会顧問、絵画会長、東京女子高等師範学校教授等を歴任しました。代表作には、「黄昏」「四季花鳥」「玄明」などがあります。昭和19年72才で没しました。

北川次郎兵衛(松田道猷)の墓 バス古賀島下車5分 古賀島町

北川次郎兵衛は、戦国時代、奥州の伊達政宗に仕えていた武将です。関ヶ原合戦後、伊達家を出て浪人となり、その後、北川次郎兵衛宣勝と名を改め、豊臣秀頼に仕えました。大坂冬の陣・夏の陣で活躍しましたが、大坂城は落城。次郎兵衛は捕らえられてしまい、元和2年(1616)幕府の名により大村藩(2代藩主純頼)に預けられ、以後、放虎原^{ほうこばる}に屋敷を構え、ひたすら原野の開拓に励みました。後に幕府の恩赦があり罪が許され、次郎兵衛の放虎原での開墾の功が評価され、放虎原開墾の恩人として伝えられています。

伝鈴田道意の墓 バス二本松下車25分 大里町

鈴田道意は、戦国時代の前期に、大村氏16代大村純伊に仕えた武将で、純伊の姉を妻にするなど重臣の一人でした。しかし、有馬氏との戦となった中岳の合戦では、大村家第3軍の将として出陣しましたが、有馬側に寝返り、これによって大村側は敗北し、領地を失ったと伝えられています。後に純伊が領地を回復した時に許され、再び大村家に仕えました。現在、道意の屋敷近くの墓地に道意のものとして伝えられる墓が残っています。中世の武将の中として貴重な遺構です。

キリシタンの史跡



ザビエルが日本にはじめてキリスト教を伝えて14年後の永禄6年（1563）、18代領主大村純忠は、ドン・バルトロメオの名で洗礼を受け日本最初のキリシタン大名となりました。

純忠は、横瀬浦や長崎に港を開いて南蛮貿易をひろめ、日本の文化、社会の近代化に一役を負うとともに、領内のキリスト教布教を熱心に援助し、領内のほとんどをキリシタン化しました。当時領内のキリシタン数は6万人に達したといわれています。

さらに天正年間には、大友宗麟^{そうりん}、有馬晴信の両キリシタン大名とともに、少年使節団をローマに派遣するなどして、大村のキリシタンは全盛時代を迎えました。

天正15年（1587）純忠は没しましたが、まもなく秀吉によりキリシタン禁令が下り、さらに徳川の天下となってキリシタン禁圧がいよいよ厳しさを加えたため、19代（初代藩主）大村喜前^{よしあき}はついに日蓮宗に改宗して、慶長10年（1605）本経寺を建立し、キリシタン宣教師を領外に追放しました。

やがて慶長17年（1612）、幕府のキリシタン禁教令が発布されるに至って、キリシタン迫害の手が日増しに激しさを加えはじめ、連年殉教の血で彩られました。なかでも明暦3年（1657）に起きた「郡崩れ^{こおり}」と呼ばれる潜伏キリシタン発覚事件は、406人が斬罪になるという悲惨な結果となりました。市内には殉教の哀史をとどめる遺跡が数多く残されています。

ほうこぼる 放虎原殉教地（斬罪所跡）

バス市立病院前又は試験所前下車 10分 協和町

明暦3年（1657年）、大村藩郡村（今の竹松、福重、松原）矢次の百姓兵作が、長崎に向出したときふともらした言葉から、郡村の百姓を中心に潜伏キリシタンが芋づる式に検挙され、ついに603人に及びました。

彼らは、大村、長崎、平戸、島原、佐賀の五ヶ所に収容され、吟味を受けた結果、406名が斬罪と決まり、このほか、78名牢死、20名永牢、赦免99名となりました。

大村では、万治元年（1658年）7月、放虎原において131人が、長崎その他で275人がそれぞれ処刑されました。この大殉教を「郡崩れ」といいます。

131人が一斉に処刑されたほうこぼる殉教地は、県立大村工業高校の右手前方にあり、銅板のレリーフはめ込んだ大きな殉教顕彰碑が建てられています。



妻子別れの石

放虎原殉教地（斬罪所跡）より東南へ10分 杭出津3丁目

受刑者たちは、ここで妻子と水盃を交して最後の別れを告げ、殉教地（斬罪所）へひかれていきました。現在別れの石数個が残っており、俗に「涙石」とも呼ばれ今でも苔が生えないと伝えられています。



仏の谷 バス萱瀬ダム下 中岳町

萱瀬ダム下の山中の旧斜面を登って行くと岩穴があり、ここが郡崩れの発端となったキリシタンの絵が隠されていた場所と言われています。

獄門所跡 バス松並公園前下車5分 松並1丁目

郡崩れの際、処刑された131人の首を塩づけにして、ここで20日間晒首にし、世人へのみせしめとしました。今は白亜の無原罪の聖母像が建てられ、遠い昔の殉教者たちの霊をやさしく慰めています。

胴塚跡 バス桜馬場下車5分 桜馬場2丁目

桜馬場の国道添いの西側に胴塚跡があり、131人の胴体は2カ所に穴を掘り埋めたと伝えられています。150m南に青銅の祈りの像が建っています。



首塚跡 バス原口住宅前下車3分 原口町

胴塚より北方約500m離れた榎の根元に殉教者131人の首を埋めたと伝えられています。首と胴を別々に埋めたのは、キリシタンの妖術で連なるのを恐れたためといわれます。今は何代目かの榎のそばに立派な殉教顕彰碑が建てられています。



大村牢跡 (本小路牢) バス公園前下車5分

慶安元年(1648年)本小路につくられました。俗にこの牢を公儀牢と呼んで、唐人牢を兼ねキリシタン囚人や、特別に幕府の指名によって捕まえた罪人を入牢させていました。万治年間、袋小路こぶちの牢が取壊しになったあと、一般の罪人もこの牢に収容しました。

鈴田牢跡 バス釜川内下車5分 陰平町

元和3年(1617)より同8年まで、外国人宣教師ら30数名を閉じ込めた牢屋の跡です。周囲も天井も竹の柱で囲まれた鳥籠のような部屋で、広さは奥行6.6m、間口4.6m、横に寝ることも身動きさえ自由にはできなかったと伝えられます。2名牢死、スピラノ神父ら25名は元和8年9月長崎へ護送され、翌10日西坂において、フランコ神父ら8名は12日放虎原ほうこぼるで殉教しました。



オランダ牢跡

御朱印船の船長として、海外貿易を行っていた浜田弥兵衛やひょうえは、寛永5年(1628)台湾のオランダ館に打入り、奪われていた商品を取り返したほか、オランダ大守の息子らを人質として日本に連れて帰り、付添人とも53名を大村と島原に分け

て収容した。大村の牢屋は、現在の県営バスターミナルビルの所であり、オランダ牢と呼ばれました。また、牢の横のV字形の溝をオランダ溝といいました。浜田弥兵衛の碑は大村公園の中に建てられています。

今富のキリシタン墓碑 県指定有形文化財

バス今富下車 15分 今富町

戦国末期における大村の重臣、一瀬^{おちきがみえしやう}越智相模^{しやう}栄正の墓です。栄正は領主大村純忠とともに、永禄6年(1563)キリシタンの洗礼をうけた一人ですが、天正4年(1576)83才で没しました。

その子一瀬^{しよだゆう}治部大輔は、父のため頭頂部に干(かん)十字架を刻んだかまほこ型の墓碑を建てましたが、禁教の取締りが厳しくなったため、墓碑を縦に起こし、前面に日蓮宗の戒名を刻んで、仏教徒であることを装ったのではないかと思います。キリシタン墓碑としてはわが国でも最も古いようで、またかまほこ型の起立墓碑は全国でも珍しいといわれています。



大村市原口郷出土のキリシタン墓碑 県指定有形文化財

上部に花十字、下部には欧字で(BASTIAN・バスチャン)(FIOBV・ヒョウブ)の陰刻がある板碑式墓碑で、このように霊名と俗名を二段に記した墓碑は他に例をみません。鬼橋町より出土したもので安土桃山時代～江戸初期ごろの相当な地位にあった人物の墓と推察されます。高さ50.3cm、最大巾員68.5cm、厚さ2.5～4.5cm半楕円形で、現在史料館に保管されています。



田下のキリシタン様式墓碑 市指定史跡

バス宮代下車 5分 田下町

田下の入口にあり、承応2年(1653)建立の平庵^{ひらいおり}型墓碑が2基見られ、仏教の戒名を1基は本体に、1基は側塔に刻む特徴をもつ珍しいものです。背後の野面墓1基は、キリシタン様式墓碑と同一戒名で、これは弾圧にたえ難く後方に仏式の墓を建てたものと思われる。

大村出土のメダリオン「無原罪の聖母」 県指定有形文化財

太陽を背に頭上に7星をめぐらし、弦月を踏んで立つ「無原罪の聖母」のメダリオン（大型メダル）です。昭和7年大村高校新築工事の際、寛永16年（1639）の墓碑銘の大村家老宇多氏の墓から出土したもので、スペイン王カルロス一世の代（1516～1556）にマドリッドの王立造幣局で製造されたものです。全長11.4cm、最大巾員7.4cmの楕円形で、掘り出す時二つに割れたものと思われ現在史料館にあります。



宝生寺の教会跡 三城町

御やどりの聖母の教会を永禄11年（1568）18代純忠が建立したが、元亀3年（1572）三城七騎ごもりの時焼けたので、天正2年（1574）旧宝生寺の脇に建立されました。領内でもっとも大きな教会堂で、場所は三城々跡の前の田の中がありました。純忠の遺体は最初ここに葬られました。戦前まで、泣きびす山という塚があって、温石の五輪塔などがあり、殿様の墓とのいい伝えもありました。

大村純忠終焉の居館跡（大村純忠史跡公園）市指定史跡

バス坂口下車3分 荒瀬町

荒瀬町大門にあります。時の重臣庄頼甫しょうよりすけの屋敷でしたが、のち、竜造寺隆信の圧迫によって領主の座を退いた18代大村純忠の晩年の隠居所となりました。純忠は、ここでひたすらキリシタンの信仰に明けくれる余生をおくっていましたが、天正15年（1587）、波乱に富む55年の生涯を閉じました。現在、館の川と呼ばれるところは庭園の一部であったと伝えられています。



天正遣欧少年使節顕彰之像 バス試験場前下車 10分

天正10年(1582)ヴァリニアーノ神父は、大村純忠、大友宗麟、有馬晴信のキリシタン大名とはかり、伊東マンシヨ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアンの4少年をローマに派遣しました。ヨーロッパのキリスト教文化を見聞させ、日本をヨーロッパに紹介するためでした。一行は長崎港を出港し、マカオ、マラッカ、インド、喜望峰をまわり2年半かかってヨーロッパに渡り、ローマ教皇と謁見しました。そして出発してから8年5ヶ月という大旅行のすえ、天正18年(1590)帰国しました。少年達は、活字印刷機械などヨーロッパの進んだ技術や知識を持ち帰り、日本文化に貢献しました。彼らが長崎港を出帆して400年目を記念し、4少年の偉業をたたえるため、顕彰像がたてられました。



伊東
マンシヨ

千々石
ミゲル

原
マルチノ

中浦
ジュリアン

郷土芸能

黒丸踊 県無形民俗文化財（国選択）

黒丸町に伝わる豊年感謝、平和祈願の古典色豊かな、勇壮で華麗な踊りで、最初は大薩摩とよびました。由来は、16代領主純伊が戦いに敗れ、6年の流浪の後、文明12年（1480）大村領を奪回したとき、その戦勝を祝って舞った踊りで、中国地方からきた浪人法養が教えたといわれています。

今も黒丸保存会によって五百年來伝えられた踊りをそのまま伝承しています。このほか、同じ由来をもつ踊りとして、沖田踊があります。

歌詞の一部 入羽

今年よりしてみろくとし 金の斗かきにこがね樹
白金たわらで米はかる
御所に参りて御門を見れば 白銀御門に黄金の扉
やら見事 やら見事



寿古踊 県無形民俗文化財（国選択）

別名殿様踊とも呼ばれています。踊子の中の1人は舞太鼓といって殿様を意味し、囲みの者は垣踊といって陪従の人が殿様を守りながら踊る意味です。

歌詞の一部

めでたき御代の始めかな
めでたき御代の始めかな
千代に八千代にませ国重なりて
御代久しかり久しかり



沖田踊 県無形民俗文化財（国選択）

別名なぎなた踊りとも呼ばれています。多数の人々がなぎなたで斬り合いながら舞うものです。

歌詞の一部

こころべあいのしやくあり
ねやをよれば かたのいたえん
くれないはぬれて色ます
ねやよめごは殿とねてます



その他の郷土芸能

その他市内には次のような郷土芸能が伝わっています

荒瀬 <small>ふりゅう</small> 浮立	荒平水計浮立	重井田浮立	田下浮立
コッコデショ(水主町)	今富浮立	下鈴田浮立	中岳浮立
獅子舞(本町)	今村浮立	鈴田浮立	大村 歙 踊
龍 踊(片 町)	松原浦相撲甚句	歙 踊(小路口)	

大村寿しの由来

文明6年(1474)大村氏16代純伊すみこれは、大村領におし寄せた島原の有馬勢2000人の大軍と中岳で合戦しましたが、味方の寝返りもあり、大村方の将兵かからの多くは壮烈な戦死をとげました。純伊は危く難を逃れて唐津沖の玄海の孤島かから加々良島に落ちのびました。そして6年後の文明12年(1480)、渋江公勢きみなりらの援軍を得て大村領を奪回し宿願を果たしましたが、このときの領民の喜びようは大へんなものでした。領民たちは、領主、将兵を迎え、早速食事の用意にとりかかりましたが、あまりに突然のことで食器が充分揃わないため、とりあえずもろぶた(木製長方形の浅い箱)に炊きたてのご飯をひろげ、その上に魚の切り身、野菜のみじん切りなどをのせて押さえたものを食前に供しました。将兵たちはこれを脇差して角切にし、手づかみで食べたといわれ、これが大村寿しの起こりと伝えられています。

以来大村地方では、祝いごとや珍客を迎えるときなどは、必ず大村寿しをこしらえることが習わしとなり、武家、町人、百姓それぞれに寿しの作り方が家伝として伝えられました。寿しおけは、嫁入り道具に欠かせないほど大切なものでした。500年を経た今も、その独特な製法は昔ながらにうけつがれ、風味ある角寿しとして有名です。



民話紹介

「勘作ばなし」

むかし、三浦村に長沢勘作さんというとん智にたけた、とても愉快な人がいて、人々に愛され、親しまれていました。それらは勘作ばなしとして伝えられていますが、その中から「宝の石」というお話を紹介します。

大村領と諫早領との境に、とても立派な石がありました。ある日、両藩から役人がでて談判をしましたが、仲々折り合いがつきません。思い余って勘作さんに相談すると「よろしい、引き受け申した。」と事もなげに現場へ来てみると役人が議論の真最中でした。勘作さんは心中期するところがあっつか、あいさつもせず、ずかずかと皆の前に出て、「あいや、各々方には何をとやかく申しておられる、この石は神代の昔より大村のものに決っているのに、今頃何のことでござるか。」と突然現われた勘作さんの暴言を聞いた諫早側の人はかんかんに怒りました。

「馬鹿を申せ諫早領の石だ。」

「いゝやたとえ何と仰せられても大村領のものに相違ござらぬ。」

「何を証拠にぐずぐずいうか。」

「貴殿たちこそ何の証拠があるか。」

「何と、この馬鹿野郎、もう許しておけぬ。」と諫早側のけんまくが最高潮に達したのを見てとった勘作さんは、得たりとばかり心の中でほくそ笑み、そしていかにも負けたように、

「えゝと、さほどまでに欲しがられるなら、やむを得ぬ、びた一文で売ってしまうか。」諫早側は、それ見よとばかり喜んで

「よろしい、びた一文で買った。それ一文だっ。」

こういって一文銭を投げ出したときでした。勘作さんは厳然として申しました。

「あいやお待ちあれ。これは大村領のものに相違ござらぬ。たとえ銭一文たりとて、自分のものを買う馬鹿はござるまい。買うと言われるからには、諫早領の石ではないはず。売ろうと申したが、都合によって当分見合わせた。」

といながらその大石に、墨痕あざやかに大村領と書いて用意して来た紙を貼りつけ、あっけにとられた人々を尻目に

「さらばでござる。」とさっさと引き上げて行きました。

資料 大村家の系図 (大村家資料による)

祖 先	藤 原	鎌 足	16 代		純 伊
祖 父	藤 原	純 友	17 代		純 前
父	藤 原	諸 純	18 代		純 忠
初 代	大 村	直 澄	19 代	初代藩主	喜 前
2 代		師 澄	20 代	2 ヲ	純 頼
3 代		永 澄	21 代	3 ヲ	純 信
4 代		清 澄	22 代	4 ヲ	純 長
5 代		遠 澄	23 代	5 ヲ	純 尹
6 代		幸 澄	24 代	6 ヲ	純 庸
7 代		忠 澄	25 代	7 ヲ	純 富
8 代		親 澄	26 代	8 ヲ	純 保
9 代		澄 宗	27 代	9 ヲ	純 鎮
10 代		澄 遠	28 代	10 ヲ	純 昌
11 代		澄 興	29 代	11 ヲ	純 顕
12 代		純 弘	30 代	12 ヲ	純 熙
13 代		純 郷	31 代		純 雄
14 代		徳 純	32 代		純 英
15 代		純 治	33 代		純 毅

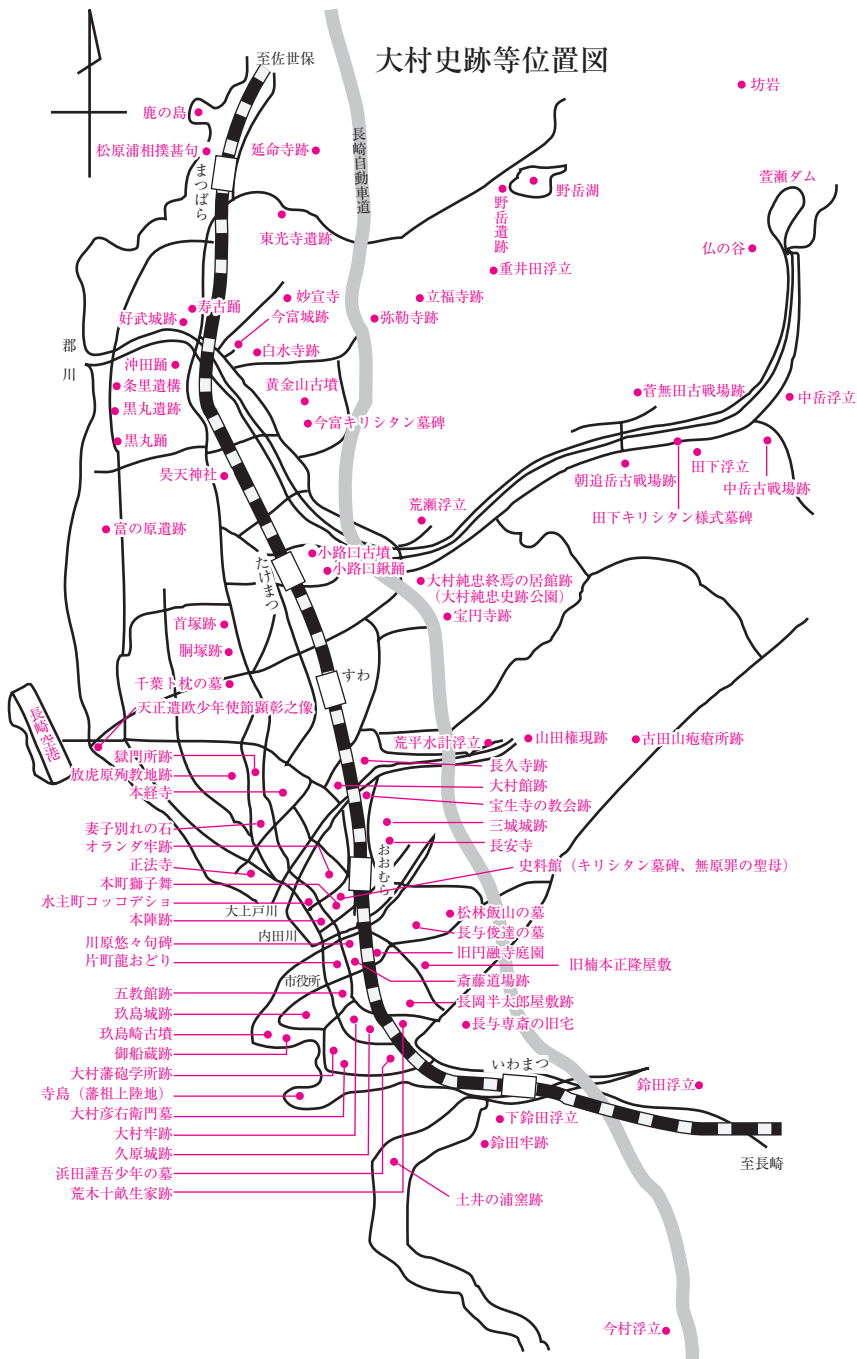
年 表

西暦	年号	日 本 史	大 村 史	領主(藩主)
約15,000年前			海拔200mの山間地に古代大村人が住みつく	
3世紀 4世紀		卑弥呼、邪馬台国の女王に大和朝廷、日本統一	黄金山、鬼ノ穴、玖島崎などの古墳が造られる	
5世紀～6世紀				
645		大化の改新		
710	和銅3	平城京		
794	延暦13	平安京		
994	正暦5		大村氏の祖先、藤原直澄が四国から大村へ入部	1. 直澄
1167	仁安2	平氏が政権をにぎる		
1192	建久3	鎌倉幕府が成立		
1392	元中9	南北朝が合一する		
1467	応仁元	応仁の乱がおこる		
1474	文明6		大村純伊、中岳の合戦で敗れ、加々良島へのがれる	16. 純伊
1480	文明12		純伊、田領奪回 寿古踊、沖田踊、黒丸踊、角ずしが始まる	
1562	永禄5		純忠の横瀬浦開港	
1563	永禄6		純忠、キリスト教に改宗	18. 純忠
1564	永禄7		純忠、三城城を完成させる	
1570	元亀元		喜前、洗礼をうける	
1571	元亀2		純忠、長崎港の開港	
1572	元亀3		後藤貴明ら三城を攻める (三城七騎ごもり)	
1573	天正元	室町幕府がほろびる		
1574	天正2		大村領内の社寺が焼かれる	
1577	天正5		菅無田、朝追岳合戦	
1582	天正10	本能寺の変(信長没)	遣欧少年使節が長崎発	
1585	天正13		クローマ法王に拝謁	
1587	天正15	豊臣秀吉、鳥津を攻める	純忠、坂口館で没	
1587	天正15	秀吉、パテレン追放令を出す		19. 喜前 (初代藩主)
1590	天正18		喜前、鳥津攻撃参加	
1590	天正18		少年使節長崎着	
1599	慶長4		喜前、玖島城を築く	
1600	慶長5	関ヶ原の戦い		

西暦	年号	日 本 史	大 村 史	領主(藩主)
1603	慶長 8	徳川家康、江戸幕府を開く		
1605	慶長10		大村喜前宣教師との交際を絶つ	
1605	慶長13		本經寺建立	
1609	慶長14		長安寺建立	
1614	慶長19		玖島城の大改修	20. 純頼 (2代藩主)
1633	寛永10	鎖国令が出される		21. 純信 (3代藩主)
1637	寛永14	島原の乱がおこる		
1640	寛永17		春日神社の建立	
1652	承応元		円融寺の建立	22. 純長 (4代藩主)
1657	明暦 3		郡崩れ、領民603名逮捕	
1658	万治元		郡崩れの逮捕者406人処刑	
1661	寛文元		深澤儀太夫、野岳湖の造設	
1664	寛文 4		千葉ト枕、放虎原の開拓	
1670	寛文10		藩校集義館が開設される	
1716	享保元	享保の改革が始まる		24. 純庸 (6代藩主)
1787	天明 7	寛政の改革が始まる		
1790	寛政 2		藩校五教館と改称	28. 純昌 (10代藩主)
1830	天保元		古田山痘瘡所が開設される	
1841	天保12	天保の改革が始まる		29. 純顕 (11代藩主)
1849	嘉永 2		長与俊達、牛痘腕種法を実施する	30. 純熙 (12代藩主)
1853	嘉永 6	ペリー浦賀に来航		
1854	安政元	日米和親条約が結ばれる		
1860	万延元	桜田門外の変		
1862	文久 3		三十七士が血盟する	
1867	慶応 3	大政奉還、江戸幕府滅亡		
1868	慶応 4	戊辰戦争(鳥羽伏見の戦い) など	大村兵、東征軍として出陣	
1868	明治元	明治維新	大村兵北伐軍として秋田へ出陣 長与専斎、長崎医学校学頭となる	
1869	明治 2	版籍奉還	大村純熙・大村藩知事へ就任	
1871	明治 4	廃藩置県	大村藩は大村県となる	
1871	明治 4		大村県は長崎県に併合される	
1872	明治 5		五教館が廃止される	

MEMO

大村史跡等位置図





〒 856-8686

長崎県大村市玖島一丁目 25

大村市企画商工部商工観光課

TEL (0957) 5 3 - 4 1 1 1

<http://www.city.omura.nagasaki.jp>

syoukan@city.omura.lg.jp

助成（財）空港環境整備協会